芭蕉とアッギェーエ考

氏名：モハッマド・イムラン

研究科：文学
専攻：日本語日本文学

論文内容の要旨は以下の通りである。

（一）本稿の要旨

本論は、芭蕉の『奥の細道』とインド詩人のアッギェーエの『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード（この旅人は記憶に残るだろう）』で描写された歴史の回顧や、旅への想い、紀行文の構成、人々の生活との触れ合いを比較分析して論じたものである。

『奥の細道』の旅では人々が忘れ去っていた、かつて繁栄していた歴史、伝統的な事物、人々と出会いなどを描くことで、当代と過ぎ去った過去の時代を繋げた。そして、歌枕を訪れ、芸術性に富む俳句を詠んで江戸文学を代表する作品を作り上げた。

一方、インド詩人のアッギェーエは、当時従軍していたイギリス軍によるインドの北東地方を中心とした任務の中で訪れた地方の、忘れられていた過去の伝統や歴史などを再発見し、現代の人々に今の時代と過去の時代に思いを馳せさせようとした。本作品はインドの北方にある自然や人々や伝統、歴史などを、旅先で詠んだ詩と散文を織り交ぜて描いた紀行文である

本論においては、両者の作品の中からとりわけ、芭蕉の旅は歌枕の巡回を中心としたものである一方、アッギェーエの旅は、軍属として各地の状況を調査するための旅であったという違いに着目する。しかし両者の旅の目的はそれぞれ異なっていても、旅の心構えは一致していることは作品から読み取ることができる。

最終的に、両作品を通して芭蕉とアッギェーエの共通点と相違点を、いくつかの観点を挙げて、論じていった。

（二）博士論文の解説

博士論文は表題の通り、芭蕉とアッギェーエ考―両者の比較の論として、6 章にわたって、論じることにした。

第一章は、インドの文化や社会を良く理解するためには、まずヒンディー語の由来を知るべきだと筆者は考え、「文学面から見たヒンディー語の歴史」という章を執筆した。本章は、日本文学との比較研究の為の基本事項として、インド人としての立場から、ヒンディー語の歴史を、その言語で記された文学事項を中心に語った。

現代インドの国語であるヒンディー語の由来は、古代のサンスクリット語にあり、時代が経つにつれて変化していった。サンスクリット語はサンスクリット語文法学者であるパニニによって古典サンスクリット語として定義され、古典サンスクリット語の次にプラクリット語が登場した。プラクリット語は更にパーリ語に変化し、プラークリット語族の文学的な言語として使用された。文法はそうした変遷のなかで更に進化したものである。サンスクリット語は再構成されアパブランシャ語となり、さらに、インドにイスラム教が導入されたことが言語にも影響を与え、ヒンダーヴィまたはヒンドゥスターニという名前で呼ばれるようになった。そして、近代になると、ヒンドゥスターニが二つの派に分化し、一つはウルドゥー語、もう一つはヒンディー語になった。

第二章で日印文学の関係で重要な役割を果たした俳句を、「インドに於ける俳句」としてタゴール時代から現代までのインドでの受容を要素ごとに論じていった。

ノーベル文学賞を受賞したタゴールは日本を訪れた。タゴールの来日は、インドに俳句を導入する契機となり、帰国後出版した『ジャパン・ジャトリ』ではインドで初めて芭蕉の二つの俳句を紹介した。けれども、タゴールと日本の関わりは、両国の諸事情により、それほど長く続かなかった。

日本とインドの交流が再開したのは、イギリスからのインド独立後のことであり、日本または日本文学の研究が本格的に始まったのは、1957 年に日印文化協定が結ばれてからであった。同年の夏、インドの詩人であるアッギェーエが初めて来日した。アッギェーエは日本文学に影響を受け、日本の俳句をヒンディー語に訳すと同時に、俳句から受けた印象を詩に表した。

帰国したアッギェーエは、1959 年に詩集『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』を出版するが、この詩集では俳句をヒンディー語に訳すと同時に、自らもヒンディー語で俳句のような短い詩を書くことを試みている。更に、日本を題材にした詩も見られる。

アッギェーエの俳句の翻訳書を出版してから、二十年の間に「俳句」はすっかりインドの学者達に定着し、日本文学に対する関心も高まった。

それまでの日本の文学は英語を主とする第三言語を介して、インドに紹介されていたが、サトヤ・ブシャン・ワルマ教授は、インドで初めて日本語を直接ヒンディー語に翻訳し、日本語の魅力を伝えようとした。ワルマ教授は日本の詩歌をヒンディー語に翻訳し、1977 年に『ジャパニ・カヴィターエ（ジャパニ・カヴィターエ、日本の韻文集）』として出版した。

『ジャパニ・カヴィターエ』によって、俳句の切れ字を翻訳で再現することを試み、また俳句の歴史を体系化して伝えるなど、学術的な文学としての俳句をインドにもたらした。そのようなワルマ教授らの活動により、インドでは俳句を創作する人が増え、1970 年頃には手紙を締め括る最後の言葉として、俳句を認めることも流行した。

第三章はこの論文の対象として、中心的に取り上げる要素の一つである「日本における韻文の歴史」と「芭蕉の文学史的位置」について論じていった。

韻文の歴史を歌謡の始まりから説明し、時代が経つにつれて現れた変化、つまり、大歌・儀礼歌・今様を説明すると同時に、韻文歴史で極めて重要な役割を果たしている勅撰和歌集と万葉集などを論じた。そして、中世の後期の時代に入ると武士や庶民が台頭してくることによって、和歌には笑いなどをテーマにするようになっていった。何人かの歌人たちが集まって詩を五－七－五－七－七－五－七－五－七－七の音節で作るようになり、それは俳諧の発端となった。最初は「俳諧之連歌」と呼ばれるものであった。このような俳諧の始まりから、発句までを論じた。

一方、第二節においては和歌・連歌では取り上げられない素材も用い、雅語だけでなく漢語・俗語を用いることによって、和歌・連歌の伝統的な美とは異なる新しい美を作り出したことなどを論じた。その中で松尾芭蕉が俳諧世界で貢献したことと蕉風の始まりなどの沿革を中心に議論を進めていった。

第四章は「アッギェーエと紀行文」でアッギェーエが執筆した紀行文とインドにおける紀行文の歴史を考察した。インドの紀行文の様々な事情や歴史から始まって、アッギェーエが執筆した紀行文まで論を展開している。

古代インドでは、ヒンドゥー教の教義により、渡航が禁じられていたことで、紀行文は見られず、逆に何人かの外国人がインドの文化や仏教の経典を目的としてインドを訪れた。例えば、古代ギリシャ人のメガステネスや、中国の僧であるファヒアン（法顕）、イスラム世界の知識人であるアル･ビールーニー、モロッコからイスラム法学者・旅行家のイブン・バットゥータなどがそうである。

そうした経緯からインドでは古代から近代にかけて執筆された紀行文は極めて少ない。そもそも古代インドでは紀行文を書く文化さえもなかったのだが、近代になると紀行文を執筆する書き手が登場し始め、タゴールのように紀行文を書くためにインドの国外に出る者も現れた。タゴール以外にラフール・サンクリトヤヤン、カカ・カレカル、アッギェーエ、ナガラジュンらも紀行文を書き始めた。

中でも、生来の旅人を名乗るアッギェーエが執筆した『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード、（この旅人は記憶に残るだろう）』と、アッギェーエの敏感な思想を理解するための資料としての、ヨーロッパでの旅行を描いた『エク・ブンド・サフサ・ウチリ（急に飛ん

だ一滴）』は本論でも中心的に取り扱うものであり、その内容の概括を行った。

第五章は「『奥の細道』と『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の比較」で、芭蕉とアッギェーエが詠んだ詩や紀行文に描写された共通点や相違点を分析・検証した。

本章では、両者の紀行文に描写された事物の中から、類似点や相違点として七つの観点、すなわち（一）過去の著名な歌人（二）著名な遺蹟や遺構（三）各地の風俗（名所、花など）（四）歌枕（五）詠んだ俳句・詩（六）人々との繋がり（俳人たち・その他の人々）（七）旅への想いに焦点を当てて比較し、論じていった。

第六章は「アッギェーエと芭蕉」の比較を論じ、三つの節に分けられている。第一節は、「俳句理解によるアッギェーエの韻文の変遷」で幼少期に言語の多義性を発見したアッギェーエは、後年俳句と出会うことで、少ない言葉による豊かな情景世界を表現しうることに気づき、自身の詩作を発展させたことなどを考察した。第二節は、「アッギェーエの俳句理解」でアッギェーエが詩的な感性による詩情の表現に重点を置き、原語の詩の持つ情景を再現することが出来たことを論じた。第三節は、アッギェーエと芭蕉の作品を比較することで、両者の作品に大きな相違点があることをつきとめた。それはつまり、芭蕉の紀行文が虚構的な操作が行われるのに対して、アッギェーエの紀行文ではフィクションの要素が見られないことである。更に、共通点としては、芸術の完成を目指したストイックな芸術至上主義者という、芸術に対するそれぞれの作者の態度という点や、言語の多義性によって豊かな芸術空間を表現しうることがあると論じた。

以上の六つの章が本論の構成となり、芭蕉とアッギェーエは、時代と国という二つの大きな隔たりがあるにも関わらず、両者の作品で描かれる内容には多くの点で共通点が見られるということを明らかにした。